

卷 頭 言



「不如樂之者」

～本校図書館所蔵

『論語(吉田賢抗著・明治書院)』より～

学校長 松 尾 幸 生

題にある言葉は、「論語」の中にある言葉の一部で、「之を楽しむ者に如かず」と読み、「之を楽しむ者には及ばない」という意味です。一部だけでは分からないのですが、その言葉全体を見ると「之を楽しむ者」はトップスリーの中でも一番で、最上級だと言っています。さて、それでは二番目はどのような者で、三番目はどのような者か考えてみてください。

考えていただいている間に、「論語」について少し述べてみます。「論語」とは、今から二千五百年くらい前の中国の思想家、哲学者である孔子と彼の高弟の言葉や行いを、孔子の死後、長い年月をかけて弟子達が記録した書物です。学問に関する内容が多く取り上げられており、学問以外にも道徳などに関する内容もあります。教育に携わる者としては、一度は全てを熟読してみたいと思うところですが、なかなか簡単ではありません。しかし、一つ一つは短い文章なので、ざっと見渡してお気に入りの言葉についてじっくりと読み味わう事は、さほど難しくはありません。ここで紹介したい言葉は私のお気に入りであり、「学びの理想の姿」であると思っています。

さて、本題に戻ります。考えていただいたものの答えは、二番目は「之を楽しむ者」で、三番目は「之を知る者」です。このことについて述べている言葉を全部記すと、次のとおりです。

「知之者不如好之者」「好之者不如樂之者」
また、読みは次のとおりです。

「之を知る者は之を楽しむ者に如かず」
「之を楽しむ者は之を知る者に如かず」

更に意味は、「之を知るものは之を楽しむ者には及ばない」「之を楽しむ者は之を知る者には及ばない」、つまり、あることについて知識として持っているだけでも悪くはないが、そのことが好きだということがより良く、更には、楽しいと思って取り組めるようになることがベストだ、と言っています。これが、学びの理想型だと私は思っています。全てにおいては無理としても、何か一つでも楽しく取り組めるものがあれば、その人の人生は豊かなものになるのではないかと思います。皆さんが取り組んでいる総合的な探究活動の中には、そのようなものが見つかりやすいのではないのでしょうか。もちろん授業や部活動も、その一つになるでしょう。正に「主体的・対話的で深い学び」がその理想型を生み出す基になるのだと思います。ちなみに、「主体的・対話的で深い学び」について昨今よく話題に上りますが、そのことを日本で初めて述べた教育学者は、高嶺秀夫ではないかと私は思っています。この高嶺秀夫という人は、幕末生まれの会津藩士で、日新館に学び、明治元年4月藩主松平容保の近習役、9月会津戦役をむかえ、その後、慶應義塾等で学問を修め、国から米国に派遣され、帰国後は東京高等師範学校教授、同校校長、女子高等師範学校校長等を務めた人です。

会津には、「樂之者」を育てる土壌が昔からあるのではないかと思います。